

# 食の喜び、すべての人に JAから広がる支援の輪

地域の笑顔は食事から。長野県内の各JAをはじめとするJA長野県グループは、それぞれ地域に必要とされる食材を届けるフードドライブ\*活動に力を入れています。ウィズコロナ時代への対応が求められる中、資材高騰を背景に値上げの波が食料品にも押し寄せています。「誰一人取り残さない」支援の現場を訪ねました。

\*【フードドライブ、フードバンク】いずれも、売れ残りや食べ残り、期限切れなど、本来は食べることができたはずの食品が廃棄されてしまう食品(フード)ロスを減らし、食べ物を必要としている人の下へ届けることを目指す活動。家庭で使い切れない食品を持ち寄るのが「フードドライブ」、ドライブとは、寄付という意味。それらを地域の福祉団体をはじめ、必要としている人の下へ届ける活動を担うのが「フードバンク」。2019(令和元)年には「食品ロスの削減の推進に関する法律」(通称 食品ロス削減推進法)が施行され、資源の有効活用の面からも推進が期待されています。



春休み。児童館に通う児童らも集まり大にぎわいのプラザ食堂テイクアウト。

## ● JAながの 生活支援の現場へ

2月下旬、JAながの総務課の担当者が、生活就労支援センター「まいさほ長野市」を訪ねていました。組合員や職員から寄せられた食料品を届けるためです。

同JAは5つのブロックで、県北部の5市10町村をカバー。各ブロック・支所ごとに開くフードドライブ活動で集めた食材は、長野市の本所に集めて県の地域振興局に寄贈する一方、それぞれの地域の社会福祉協議会に直接届ける活動にも力を入れています。

「寄贈してくれた組合員らの地元で、顔が見える支援につなげたいからです」と担当者。受け取った「まいさほ」の担当者からは「コロナや物価高の影響を受け、失業や減収した方の相談が増加しております。年金生活者からの相談も増えており、就労を目指して来所される方もいます。寄贈いただいた食料は、支援の一環として、お困りの世帯にお渡ししています」と現場の実情が語られました。



持ち込んだ食材を点検するJAながのと「まいさほ長野市」の各担当者

## 弁当テイクアウトを支える

3月下旬、須坂市北部、旭ヶ丘地区の住宅街に立つ同市旭ヶ丘ふれあいプラザ。地域の子どもたち向けに「プラザ食堂」のカレー弁当テイクアウトが行われていました。地元のボランティア組織「旭ヶ丘地域づくり推進プロジェクト」のメンバーが7年ほど前から続けている同食堂で、コメを中心に食材を支えているのがJAながのです。

同JAは2017年、県と連携して「こどもみらい基金」

を設立。こども食堂への支援をはじめ、食へのサポートを中心とする共同プロジェクトで、フードドライブで欠けがちな生鮮食品購入のための金銭支援にも役立っています。プラザ食堂でも、「現物支援を受けるコメ以外の食材調達に重宝しています」と同プロジェクト副代表の東海林文子さん。

「始めた当初は予算のやりくりで苦労しました。コロナ禍で一時は中止に追い込まれましたが、周囲の理解も進み、テイクアウトにした効果もあって、150人近くが集まるようになりました」とも。民生委員を務める東海林さんは食堂とは別に毎週1回、25軒ほどの家庭に直接、弁当を届ける活動もしています。



ボランティアの手で進む盛り付け作業

## ● JAグリーン長野 直売会員の協力で 生鮮野菜

野菜や果物などフードドライブでは扱いにくい生鮮食品の確保ではJAグリーン長野のA・コープ直売会南長野支部の活動が注目です。会員が直売所に出荷したものの、売れ残ってしまった農産物をこども食堂などに寄贈する仕組みです。

同市篠ノ井のA・コープファーマーズ南長野店。毎日夕方、県内でこども食堂を展開しているホットライン信州の担当者が、訪ねてきます。農家が同店の直売コーナーに出荷した農産物のうち、翌日午後3時までに回収されなかった品を受け取るためです。3月初めのこの日にはキノコやリンゴなど5ケースが集まっていた。

出荷した農家が回収する手間を減らすことを兼ねて

2020年から始まりました。現在は同じ管内の篠ノ井店の直売コーナーからの提供も受けています。3年近くを経て、すっかり定着しました。

回収に来ていたホットライン信州の担当者は「野菜など生鮮食品はこども食堂でも不足しがちなので、ここでの食材調達は重宝しています」。夏場の需要期には出荷する農家も多いため、寄贈に回る野菜や果物が20~30ケースになる日もあるといいます。

寄贈された野菜などは、これも同市三本柳の同JAの遊休施設に確保した冷蔵庫に運ばれ、一時保管。周辺はもとより松本市地方のこども食堂にも分けられています。



農家が直売コーナーに預けた農産物をホットライン信州の担当者が、毎日、回収していきます

## ● JA信州うえだ 主力は女性部

3月下旬、東御市で開いたJA信州うえだ女性部の総会。持続可能な社会へ、国連が進める17のゴールを示したSDG'sのアイコンを張り出した仕切りの前で役員らがフードドライブを募っていました。

出席者は受け付けを済ませると、提げてきた袋やカバンから缶詰や乾麺などの食材を大事そうに取り出し、次々に箱へ。JAのフードドライブ活動の主役を務める女性部の会合では、各地でこんな光景が繰り返されています。

同JA女性部部長でJA長野県女性協議会会長を務める久保町子さんは「当部は「食」と「農」を軸に地域づくりを進めてきました。その学習活動の中で、物があふれる時代に、身近な地域の中で、3度の食事にすら困っている家庭が想像以上にあることを知りました。以来、フードドライブ活動にも力を入れています。こどもたちへの思いの表れか、お菓子を持ってくる方もたくさんいます。よりよい地域にするため、自分たちができることを一、「誰一人取り残さない」という思いを胸に活動していきます」と語っています。



フードドライブの受付に立つJA信州うえだ女性部の役員。左から2人目が久保町子部長

## ● JAみなみ信州 女性理事の提案で 理事会でも

JAみなみ信州女性部のフードドライブへのスローガンは、コメ消費拡大への取り組みも絡めて「持ち寄り米(まい)!届け米(まい)!」。女性理事の提案で、定期的に関心する理事会にも広がっています。

「これまで女性部が中心でしたが、食を支えるのは言うまでもなくJAの大きな使命です。役員が集まる理事会こそ率先して開きませんか、と提案したところ、すぐに始めてくれました。2年前からです。稲作農家も多いのでスムーズに集まっています。年2回ほど声を掛け、理事会に合わせて持ってきてもらっています」と提案した遠山幸江理事。

組合長以下理事ら役員40人ほどが集まった3月の理事会では、入り口に置いたテーブルにコメを入れたビニール袋などを次々に差し出していく姿が見られました。



寺沢寿男JAみなみ信州組合長(右端)からコメを受け取る同JAの5人の女性理事(中央が遠山幸江理事)

## 必要な人に確実に ~フードバンク信州 美谷島越子副理事長・事務局長に聞く~

世界的にはコメ余りなどと言われていますが、私たち支援の現場では、日本人の主食であるおコメがなくて困っているという方がたくさんいます。特に子育て中の世代が深刻です。

コロナで取りに来るのも大変だろうと、小学生がいる家庭に焦点を絞り、2020年からウェブやファクスで直接申し込みを受け付け、個別郵送する「緊急子ども応援プロジェクト」を始めました。全県を対象に21年度は2335軒に、

22年度は2670軒に食料の詰め合わせを届けました。コロナで収入が減る一方、子どもの教育費や物価高騰の影響により、しわ寄せはもっぱら食費に。「本当に助かった」といった声が寄せられています。

ウィズコロナ時代への対応を含め、本年度は地域との連携を深める方法で取り組みたいと考えています。地域との協力により、緊急支援としての「子ども応援プロジェクト」は夏休みを境に再開したいと思っています。

私たちの活動は貴重な食料を有効に活用するため、必要な人に届けるためのルートをつくることです。そこに乗せる食料を集めるため、JA、特に女性部のみなさまには大変お世話になっています。直接お米を持ち込んでくれる農家の方もいます。多くの人にこうした仕組みを知ってもらい、役立ててほしいと思います。

フードバンク信州 副理事長・事務局長 美谷島 越子

